

がんが治る時代に向かって： 医学的根拠に基づいたがんの免疫療法

ヒトの持つ免疫監視機構が、なぜがんに対しては十分機能しないのかということ、がん治療における大きな課題でした。もしがんに対しても正常に免疫が機能するならば、感染症による膿瘍などと同様、あるところまでがんを取り除いてやれば、再発なくがんを治せるはずで、近年免疫学の進歩により、免疫抑制機構をはじめとした自己免疫寛容の仕組みが次第に明らかになってきました。そして、どうやらがん細胞はこの仕組みを巧みに利用していることが判ってきました。1992年京都大学の本庶先生率いるグループが見いだしたPD-1 (programmed cell death-1) 分子によるT細胞に対する免疫逃避機構はその一つです。T細胞側の有するPD-1蛋白に対し、PD-L1という蛋白が結合することで、T細胞は攻撃のシグナルを送ることを止めてしまうのです。がん細胞はこのPD-L1というタンパク質を発現することで免疫寛容を成立させているようなのです。

このT細胞側のPD-1蛋白をモノクローナル抗体でブロックし、PD-L1蛋白の結合を阻害するnivolumab（オプジーボ®：ヒト型ヒトPD-1モノクローナル抗体）という薬剤が、我が国でも2014年9月から悪性黒色腫に対し

て保険適応となりました。ダカルバジンによる化学療法歴を有する根治切除不可能なステージ3ないし4又は再発悪性黒色腫患者35人に対して投与して、国内第2相試験が行われ、22.9%の奏効率、473日（16.9カ月）の生存期間中央値が得られました。従来の標準的化学療法薬剤であったダカルバジンを中心とした治療では、奏効率が10-20%、平均生存期間が6~9カ月であったことを考えると著しい治療効果です。

ただし、この薬剤による悪性黒色腫に対する治療が行えるのは、適切に薬剤を使用できると考えられるがん薬物療法専門医と、正確な診断・評価のできる皮膚科のある病院に限られています。和泉市立病院がんセンターはこの要件を満たしており、現在この薬剤による治療を行うことが可能です。

また本年の秋頃には、肺癌に対しても同薬剤による治療が可能になる予定です。

がんに対する免疫治療がさらに進歩すれば、感染症のようにがんが治る時代が来るかもしれません。また、このような免疫の仕組みが判ってくることで、従来難治と言われてきた他の疾患に対する治療、自己免疫疾患に対する治療も飛躍的に進歩するものと考えられます。



腫瘍内科 部長
副がんセンター長 佃 博

病院の理念



- 1、患者さんの視点に立った安心・安全な医療の実践に努めます。
- 2、患者さんに最適な医療を提供できるように努めます。
- 3、新しいことにもチャレンジし、医療の質の向上に努めます。
- 4、思いやりのある医療人の育成に努めます。

【糖尿病外来】をはじめました。

診察時間：木曜日
17:30～19:00
担当医：丸山 康典

1型、2型糖尿病の外来診察を週に1回行っております。

コントロールに難渋する症例などございましたらご紹介頂ければ幸いです。

※コントロールが悪く入院が妥当と思われる症例、入院での負荷試験などが必要な症例については、連携している近畿大学医学部堺病院にご紹介させていただきます。

★新任医師の紹介★

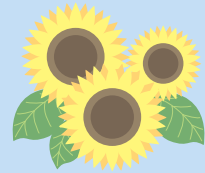
整形外科



やまもと こうへい
山本 耕平

平成27年4月より勤務しております。整形外科の山本耕平と申します。

卒後5年目で後期研修をさせていただいています。これまでは清恵会病院、石切生喜病院で研修していました。整形外科の各専門分野について学びながら骨折を中心に執刀しております。骨折を疑う患者様がいらっしゃいましたら御紹介いただければと存じます。



小児科



とみ た かず よし
富田 和慶

和泉市立病院には、医学部6年生だった平成20年に実習で訪問しています。当時は小児科と呼吸器内科で、スタッフの皆様から熱心なご指導を頂戴し、学生時代の思い出となりました。

それから7年が経過し、この4月から今度は小児科として勤務しています。ここ3年間は主に大学で過ごし、市立病院勤務は久々です。助言を必要とする事ばかりですが、偶然にも小児科スタッフは数度の転勤を経て、7年前とほぼ同じ。相談の有無に関わらず助言がもらえるありがたい環境です。教えられた内容を吸収し、皆様のお役に立てるよう精進して参りたいと思います。

◆ちょっと一言欄（何かお気づきの点があれば、FAXにて送信ください。）◆